
こころを求め

種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こころを求め

【Nコード】

N1045Y

【作者名】

穉

【あらすじ】

桐島碧斗はや　ザの抱える殺し屋だったがある日、仲間の裏切りにより死んだが恨みを抱くことは無かった。彼には心がなかった。目覚めたのは真っ白い部屋だった。そして目の前に居た少女に「つまらない人生ね」そういわれたのだった。そしてちいさい頃やっつた事のあり今でもちよくちよくやっつているポケモンの世界でゾロアークに転生させられることになったのだった（ゾロアからです）

ぶるるーぐ

何体かつみあがった死体が山を築き、そこから滴る血が、海になつていた。これは

ヤクザ間の抗争だった。その光景はまさに地獄絵図だった。しかしその中に血の滴

る刀を持って、無表情で立っている青年がいた。名前を”桐島きりしま碧斗あおと”

といった。そしてこの惨劇は全部この青年が所属する組の命令でやったものだった

。その横に歩いてくる人影があった。桐島は歩いてくるその人影のノド元に刀を向

けた。

「だれだ」

抑揚の無い冷たい声で桐島がいった。すると人影が、

「俺だよ俺、田中だよ。」

といった。人影は桐島と同じところに所属する、田中 直人、といった。すると桐島は

「お前か、仕事をした後の俺には近づくな。次は殺すぞ」

といい、それに対し田中は、

「おお、こわ。そんな恐いこと言わないですよ。それよりまた派手にやったねえ〜。流石

はボスの懐刀だねえ〜。ムカつくくらいに。たくさん仕事をしてくれてたけど、そ

ろそろ邪魔かな、俺の出世にね。」

カチャリ、と音がしたとおもつと桐島に銃を向け引き金を引いた。バンツと音がして

桐島に弾が当たった。そして桐島は殺されるその瞬間も無表情だった。桐島が死ぬ直

前に、田中は、
「ふ、やっぱり死ぬ瞬間もボスの心のないのお人形は無表情なんだな。」

目覚めると真っ白い部屋に居て、目の前に小さな少女が居た。
「うん~~~~~殺されたのに殺された相手にも恨みを抱かない何て哀しい人生だね。」

シロイヘヤ(前書き)

今回はやったら会話が多いです。

シロイヘヤ

「うっっっっん、殺されたのに殺された相手にうらみも持た無いなんてなんて悲しい人生だね。」

「.....」

そんなことを言われてもやっぱり碧斗は無表情だった。

「こんな子と言われても感じない？つまんないの」

「.....言葉遣いが間違っているぞ。なんて悲しい人生だねのところだ。なんて〜というならそこはだろっというべきだ。」

碧斗はそういった。それにたいして少女は、

「細かいねえ〜。ここに来たときに、ここはどこかと聞く前にそんなこといつてきたのは始めてだよ。ま、君みたいな経歴の人も初めてだけだね。」

そういった。やはり碧斗の表情は動かなかった。少女は溜め息をつきながらも説明した。

「はああ。まあ、いいわ、えっとあたしの自己紹介からしようかしら。わたしは・・・神です。主に人の運命と輪廻転生、世界を作ったり壊したりしています。そして、桐島 碧斗貴方は死にました。」

「.....」

「無反応とはいいい度胸ね。このままだと話が進まないから勝手に進めるわよ。えーとあなたは死にましたが生き返ることが出来ます。」

それを聞いた碧斗は困ったような顔をしながらこういった。

「俺はたくさんの人を殺したし、相手の大切な人も奪った。そんな俺に生き返って人生をやり直す資格なんてない」

それを聞いた少女は驚いたような顔をしながらこういった。

「あんたには ころろ がない。

空はあると思うことがあっても事あっても空の青さが素敵だと感じる事は無い。

今日は寒いな明日は雪が降るかもしれないと思っても、積もるかな、とおもうことは無い。

あなたは、人の温もりを感じることは無く、人への恨みも、人からの恨みも、憤慨も、悲しみも、楽しみも、憂いも、

杞憂も、何も感じる事がない。そうですね？」

そういわれても碧斗は表情を変えずにいった。

「ああ、そういわれていた。」

それに対して少女はニコニコしながらこういった。

「全て分かっているよ。だって前にも行ったようにあたしは神だもん。あたしの気まぐれって言うのもあるけどやっぱり面白そうだからかな。」

おもしろそう、という事に疑問を感じたのながらも碧斗は、神

に聞いた。

「で、俺の転生先はどこだ？」

その言葉を聞いた神は、待ってましたといわんばかりの顔をして言った。

「あなたの転生先は唯一あなたの楽しんだゲームであるポケットモンスター - の世界です。今でも楽しむことは無くてもBWもってんでしょ。」

シロイヘヤ(後書き)

更新遅れてすみません

転生先は……（前書き）

更新遅れて申し訳ございませんでした。

転生先は……

碧斗が目を開けるとそこは空の上だった。空の上といっても浮いている

わけでもなく、降下していた。現在進行形で。

「……やばいな」

そう言うてはいるが顔は全くヤバイと思っている様子も無くお決まりの

無表情であった。

碧斗は自分の身体を見てみるとふと、あることに気がついた。何故こんな

なときに自分の身体を見る余裕があるのだろうか。

「……体が、……透けている」

自分の手を通して下を見てみると下の景色が見えた。

「……これが魂という状態なのか……」

時は少し前にさかのぼる……

「面白そうだからって言うのはうそだろ」

碧斗はそう言った。神は苦虫を噛み潰したような顔になりながら言った。

「ち、ばれたか。その洞察力は褒めて使わす」

碧斗は顔色1つ変えずにいった。

「早く言えよ」

神はつまらなそうな顔を変え真剣な顔になり言った。

「実は、あなたの心が無くなったのは、人による訓練のせいではありま

せん。私達神によるものです。」

神は一息ついてからまた話し始めた。

「正確には、私の仲間の神に遺伝子実験を施されたポケモンによるもの

です。その名も、ダークライ。ダークライは、研究員を殺し、研究所

を破壊して、次元を超えて別の次元に行きました。

「それが、俺の世界で、次元を超えた先でたまたまであった俺の心

を、

奪ったってことか？」

碧斗は神の言葉をつないだ。

「そういうことです、すいませんでした」

神はそういつて頭を下げた。それに対し、碧斗はこういつた。

「悪いのはあんたじゃない。遺伝子操作したヤツだ。それより奪われた
れた

おれのこころはどこいつたんだ？」

神は碧斗に感謝の意を表しながらいつた。

「ありがとうございます。あなたの奪われた心は一つの塊になりました

しかし、私がボッコボコのメツタメタにしてポケモンの世界にぶ
っこ

む過程で間違えて壊、悪あがきとして一つ一つの感情にばらして、
イツシュ地方の各地にばら撒いてしまったのです」

それを聞いた碧斗はいつた。

「前言撤回。全部神様のせいだな」

それを聞いた神様はしかめっ面になっていつた。

「ち、ちがうわよ、魔改造ダークライを作ったのは、あたしじゃない
いし

「……は、」

神様は自分の状況に気づいたのか、オホン、と咳払いしていおう

とし

だが碧斗が、

「おい、だいじょうぶか？かおが紅いぞ」

それに対し神様はキレた。

「うるっさいわね、あんたのせいよ、すこしは黙って人の話を聞い
てな かみだけと

さいよ。」

神は、はあはあ、と肩で息をし、少し落ち着いてから話を再開さ
せた。

「と、いうことでああなたはポケットモンスターの世界でパートナー
を見つけ、一緒に心

を探してもらいます。」

それを聞くと碧斗は神に質問した。

「パートナーいなく」だめです」

と、神は話をさえぎった。

「質問はそれだけですか？」

それを聞くと碧斗は少し考えていった。(勿論無表情だ)

「なにかくれるものはないのか？」

それには神が驚いた表情で答えた。

「え、なにかほしいものがあるんですか？」

「いや、ない」

それを聞いた神は大きくずっこけた。

「な、無いならいわないでください。まあ、そういうなら私と直接会話できる携帯をあ

げます。あと、あなたが生前使っていた長ドスを渡しておきます。伸縮式にしますか

？」

「ああ頼む」

それを聞くと神は

「では先に携帯をさきにわたしておきますね」
と言い残し、突然出現した扉に入っていた。

カンカン、ドン、ガシャン、

また扉が出現してすすだらけの神様ができてきて長ドスを碧斗にわたしていった。

「ハイこれで伸縮式になりました。ために、縮め、と念じてみてください」

「ありがとう、じゃあ試させてもらおう」

「縮め」

キュイイイイイイン

と、音をさせながら碧斗の刀は持ち手を合わせて5センチほどまで縮んだ。

「これくらいでいいですかね、では頑張ってください」

「ああ、いろいろありがとう。」

そういつと碧斗の体が消え始めた。

「あ、言い忘れましたがあなたが地獄に落とそうとする閻魔の手下には気をつけてくだ

さい。」

神の注意は碧斗には届かなかった。神は碧斗の体が完全に消える
といった。

「ちゃんと聞こえたかなあ。ま、大丈夫よねあの人なら」

そして冒頭の場面に戻る

碧斗の体は段々と大地に近づいていた。近づくにつれ下の様子が
見えてきていた。

巨大な山脈が円形になっており一部から巨大な川流れていた。円
の中は平地になって
いて所々森になっていた。平地の細部が見えてくるようになった
頃、突然碧斗の気が
吹っ飛んだ。

碧斗 side

目覚めると真っ暗で窮屈な場所に居た。その壁は押すと簡単に割れた。すると外に

は二足歩行の黒い狐がいた。その狐は俺を見るとこういった。

「オイ、一匹目が産まれたぞ。誰か来ーい。」

うまれたああ、そうか俺は卵を破ったのか。周りを見てみると他にも卵があった。卵

の殻を見てみると自分の顔が写っていた。先ほどと同じきつねに似ていたがもう少し

きつねに近かった。

「ゾロア、か、」

転生先は……（後書き）

碧斗は色んなことを思ったり、言ったりしていますが無表情、無感情です。

碧斗の道具

携帯

折りたたみ式の携帯。神と即座に通信できる。普通の携帯としても使用可。

長ドス

碧斗が生前使っていた刀。神により伸縮式になった。

今更ですが、お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。
感想意見お待ちしております。

自分の能力そして友ついでに旅立ち（前書き）

感想、意見お待ちしております

自分の能力そして友ついでに旅立ち

「ソラ、元気でいるよ。そして、たまには帰って来いよ。」
俺はたくさんポケモンの集落であるこの地、名前は特に決まってい

ない。そして、俺は今この地から旅立とうとしていた。

先程、俺に声をかけたのは育ててくれた父だ。その隣にはハンカチを持つ

て泣いているのは、母だ。

俺は、ソラと名づけられこの二人に育てられた。理由は瞳の色が空の様な

青色をしているからだった。

今の状況になった理由を産まれたときから話そう。

時は数年前にさかのぼる……

ペキツペキペキペキ、と音がして卵が割れた。中からは狐みたいな顔をした

動物が出てきた。種類名をゾロアといった。するとこちらも狐に似ているが

二足歩行をしてもつと大きな動物。ゾロアークというが、いった。

「オイ二匹目が孵ったぞ」

そうすると、メスのゾロアークがつつ飛んできて碧斗を抱き上げてそ親のと

ころに連れてきた。すると、親である2匹がこういった。

「お、こいつの眼は空みたいな青色をしているな。」

「まあ、確かにそうですね。じゃあ、この子の名前は、ソラ、にしましよう」

こうして碧斗は、新しくソラ、と名づけられた。ソラには姉一人と、妹が

一人いた。

姉の名前を、クレナイといい男勝りで、勝気な性格だった。

妹は、ミドリといい物静かでおとなしかった。

父親、レンといい、のほほんとしていて、寛大な性格で、無口で

無愛想で

無表情なソラを気味悪く思うことなく、むしろそんなソラを楽しんでいた。

母親は、アスカといい、こちらも父と同じく重度の天然だった。

産まれてから数日後ソラに電話がかかってきた。

「あ、もしもし。碧斗くん、じゃ無かった、いまソラくんだけ。実は言い

忘れてた事があってさあ、いい忘れてた事って言うのは、あなたの能力の

ことなの。

あなたの能力は、人になることができます」

「ひとになること、つまり、人とゾロアもしくはゾロアークを歩き来できる

という事か。」

「うん、そういう事なのよ。でも完全に人ってわけじゃなく、言うならば

獣人ね。でも手違いがあって・・・」

しばんでいく神の声にたいし、ソラは更に追撃をかけた。

「またか、間違いの多い神様だな。俺はてつきり神様は完璧なんだと思っ

ていた」

それを聞いた神は、キレ気味に言った。

「あなた、私を全知全能の神かなんかと間違えていませんか？私は、運命を

司る神であって何でも出来る便利な神様じゃないんです。」

「威張って言う事じゃないな」

「うるっさい!」

キレタ。

「だまれ」

ナレーションに突っ込まないで。

「エーッと気を取り直していきましょう。手違いというのは……

あなたの姉妹は、あなたと同じように人になれます。

しかも、姉と妹のほうがあなたより人に近いです。というより、ぶっちゃけ

完全に人です。」

「へー。」

「反応薄ッ」

はあ、と溜息をつき、言った。

「実はもう一個あげた能力があります。あなたの幻影は同種族よりも強いです

いや、最強です。あとあなたは全ての技が使える上に、回復力がバカ高いで

す。それと、何か欲しいものはありますか」

それを聞くとソラはすぐに答えた。

「ブレスレットが欲しい。」

それを聞いた神は不思議そうに言った。

「ブレスレット？何でそんなものがあるんですか？」

「いや、ただのブレスレットじゃない、特殊な能力がついたもので、その

能力というのは

- ・つけていると技の反動を受けない。
 - ・自分がとろうとしない限り取れない
 - ・幻影・人チエンジで体力を使わない
 - ・壊れない
- だ。」

「ううわがままですね、まあ出来ますけど。すぐに送ります。」

「ああ、助かる。」

そういつてソラが電話を切ろうとすると横から足音と共に声が聞こえた。

「おいソラ、だれと話していたんだ？」

そういつてきたのは、カイト、好き好んでソラに話かけてくるような物好きだ。

彼は、色違いだった。この間、そのことでいじめられていた所をソラに助けて貰ったのだった。

「オイ、そんなことよりもお前んち今大変な事になってるぜ。」

それを聞いたソラはカイトを放置して自分の家へ走り始めた。

遅れずについてきているカイトにソラは聞いた。

「大変な事って、何だ？」

カイトが笑いながら言った。

「行ってからの お た の し み」

そういつている内にソラの家に着いた。家の中に入るとソラのレ
ンとアスカが居
て珍しく厳しい顔をしていた。家に入って来たソラに気づいたレ
ンが言った。

「ソラ、お前に話がある。」

それを聞いて出て行こうとしたカイトをアスカが引き止めた。

「ああ、君は出て行かなくていい。多分、ソラのことだからあなた
には話したことだ
と思うから。」

カイトとアスカの会話が終わった途端、レンは徐に（おもむろ）
口を開いた。

「話というのは、もう分かっていると思うがクレナイとミドリが

人になったこと

についてだ。あれは幻影もしくは変身の度を超している。戻り方
を知っているんだ

る？」

「ああ、」

と、碧斗が答え、続けた。

「少し待ってくれ」

実はソラはしらなかった。だから両親に見られているのも気にせず神に電話した。

「もしもし、神様か？」

すると神は答えた。

「そうですね。とりあえず今忙しいので急ぎでないのなら後にしてくれませんか」

「人から戻るのにはどうすればいいんだ？」

「戻りたいと思えばいいんです。出っ来たあーブレスレット。今送るからね」

そういつて電話は切れた。電話が完全に切れたことを確認してソラは言った。

「戻りたかったら戻りたいと思えばいいらしい」

「わかった。」

それを聞いた途端にアスカは奥の部屋に走っていった。

「それは信じて「もどったわよー」

レンがソラに、信じていいんだな、と問おうとしたときに奥から声が聞こえた

「戻ったのかよかった。」

そういつて安心しているレンにソラは聞いた。

「俺がどこから来たか聞かないのか？」

そう言ったソラにレンは笑って答えた。

「何故それを聞く必要がある？俺達はこうやって、一緒に飯を食べ、暮らしてい

る時点でお前が何であろうと、家族じゃねえか」

それを聞いたソラは、泣いた。無感情であるはずのソラは父親の胸で、泣いた。

こんな自分を無条件に愛してくれるのが嬉しかった。

ソラは、人の温もりを知った。

それを空から見ていた神は言った。

「欠片じゃ無くても手に入るものがあるんだ。知らなかった」

数年たちソラは学校に入った。他とかかわることは無かった。学校を、勉強も、

バトル部門もトップの成績で卒業した。カイトは、バトル部門はまずまずだが、

勉強はソラの次に良い成績で卒業した。この二人のダブルバトルでの連携は

相性抜群だった。

人で言う10歳の頃、ソラは進化してゾロアークになった。2日後にはカイトが進化した。しかし、ソラは神の手違いにより、ゾロアークになっても尻尾があつた。しかも、もふもふの。

ここのゾロアークたちには掟があり、掟とは、
・進化したらここに残るか出て行かなければならない
・出ていくのなら試験を受けなければならない
ソラの姉クレナイは、出て行くのを選び、2年前にここを出て行った。

ソラとカイトは無論、出て行くのを選び、試験を受けた。試験とは、自分の両親のうち、どちらかと戦い、勝つことだった。難しいといわれるこの試験を、二人はいとも簡単にパスした。不正じゃないかと言われたほどだった。

そして冒頭に戻る

「ソラ、元気でいるよ。そしてたまには帰って来いよ」

その言葉を受けソラとカイトは故郷を後にした。

自分の能力そして友ついでに旅立ち（後書き）

ヒロインを出す予定でしたが、やめました。

そこで、ヒロインの名前を募集したいと思います。詳細は活動報告で。

とりあえず今度から無表情・無感情・無愛想を三無主義と書く事にします

新天地と出会い（前書き）

ゾロアークのソラ、今日もかわらずニ無主義

新天地と出会い

とある森奥深くひとりの女の子が泣いていた。

「おかあさん、どこ……」

その背後で光るものが二つあった。

ソラSIDE

集落から出るには当然山を下らなくてはならなかった。集落を出るための試験は

山を下るのに十分な能力ちからがあるかを試すためのものだと聞いていたがそこまで

下るのは大変ではなかった。むしろ、試験のほうがかつた。そんなことを言っていると

カイトが言った。

「試験のほうが簡単だったら意味無いじゃん」

と、言い終わつたとき森が突然開けた場所に出た。長からもらった地図を確認すると1番道路わきに出たらしかった。カイトとはそこで別れた。別に意見が違つたとか、喧嘩したわけではなく、志が違つただけだからだ。しかし俺達は別れる瞬間きにある約束をした。

「必ずまた逢おう」「」

と。俺はカノコタウンに向かい、カイトはツヨキモノを求めてチャンピオンリーグへ向かった。

カノコタウンにはついたがさすがに行けばつかまる可能性が出てくるので森に行く
と巻き毛の女性が出てきた。こちらに気づくと女性は言った。

「ゾロアークが何でここにいるの！まあ、いいわ。せつかくのチャンスだから捕まえようかしら。」

とりあえず逃げた。いま戦うのは止めたほうがいいと思ったからだ。そして逃げている途中で、ある事に気づいた。

「人になればいいのか。」

そして誰もいないことを確認し、人になった。髪は背中の中くらいまであり、赤色だ

った。服は黒色の着物だった。

人になり終わった頃に、女性が来てソラに息を切らしながら言った。

「はあはあ、そこのあなた、ゾロアークを見なかった？」

俺は答えた。

「いや、みていないが」

「あ、そう」

そういうと女性は走っていった。

S I D E o u t

それから数日後、森の奥から子どもの悲鳴が聞こえた。ソラが急いではしっていくと

、5、6歳位の女の子がペンドラーに襲われていた。

「こ、こないで」

「シャーシャー」

そのときペンドラーが女の子に襲い掛かったが、当たる直前にソラのジャンピンググキック

が炸裂し、ペンドラーが吹っ飛んだ。そしてソラは女の子に背中をだしてソラが言った。

「乗って」

女の子は少し動揺していたがペンドラーが起き上がり始めるとすぐに乗った。

ソラは女の子が乗ったのを確認すると近くの木の枝に飛び移ると、ペンドラーは諦めたのか去っていった。

ペンドラーが去っていったのを確認して、ソラは地に降りた。女の子を降ろす

して周囲を確認した。

目の前には木が無く開けた場所になっていて草も比較的短く、中央には池があった。

実は、ここはソラが昨日見つけた場所だった。見つけた当初は、池は緑色で、短い草は、もっと長かった。が、ソラが一日で綺麗にしたのだった。

女の子は周りを見回すと驚いた様子でいった。

「き、きれい」

ソラは女の子が驚いている間に女の子をじーっと見ていた。女の子は、髪は背中の中真ん中までありオレンジ色で、白いワンピースを着ていた。

視線に気づいたのか女の子がふりむいていった。

「助けてくれてありがとうございます。私は、エルレインといいます。エルって呼んで下さ

い」

「気にするなエル。俺はソラだ。」

そしてソラは続けて言った。

「エル、君はどこに住んでいるんだ」

エルは答えた。

「カノコタウンに住んでいます。」

少し赤くなってきた空を見ながらソラは言った。

「もうすぐ暗くなる。そろそろ帰ったほうがいいぞ。」

それを聞くとエルは、残念そうな顔をしたが、おずおずといった様子でソラにきいた。

「また来ても・・・いいですか？」

少し時間がたってからソラが答えた。

「好きなときに来ればいい。カノコタウンからだに近いしな」

エルはそれを聞くと満面の笑みでいった。

「ありがとうございます」

去っていかこうとするエルにソラは聞いた。

「君は、無表情な俺が、怖くはないのか？」

また、エルは笑みで答えた。

「いいえ、だってソラさん優しいじゃないですか。」

タツタツタとかけていく女の子の後姿を見ながらソラは言った。

「俺が・・・優しいか・・・わからないな」

新天地と出会い（後書き）

ヒロインの登場です。別にソラはロリコンではないです

登場人物紹介（前書き）

短くてすみません

登場人物紹介

早いですが、登場人物紹介です。ヒロインの情報が少ないのでそのうち足します。

ソラ（桐島 碧斗）

年齢 19歳（転生後、ヒロインとの出会い時は8歳）

性別 男

外見 髪は赤で、背中の真ん中まである。頭に獣耳がある。服は黒い着物。

簡単に言くと、ゾロアークカラーの犬夜叉。

種族 ゾロアーク

能力 ポケモンに出てくる全ての技が使える。
回復力が高い
もふもふの尻尾がある

武器 長ドス 伸縮式

説明 転生前は、ヤクザの殺し屋だったが、仲間に殺された。こ

ころが無く

、常に無表情である。

実は、馬鹿な神が造った魔改造ダークライに心を奪われたため。

それを、詫びて転生させてもらった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1045y/>

こころを求め

2011年12月10日23時52分発行